スシはしばらく静かに聞いていた後で言った。
—チェマ　明らかにしたいことが一つ有ります、その女性は貴方にナンパされたのでしょう、どんな彼女でしたか？
—しかし、スシ！...
彼女の質問に少しびっくりしてペペは言った。
—これはチェマのプライベイトに属する問題だ。
—チェマ、もし君に迷惑なら答えなくて良いよ。しかし、彼女について何か役に立つ（情報）かもしれないと思うよ。
—いいえ、かまいません、彼女は下品のみの女でした。気も狂うほどの一夜でした。ええ、最高に下品な女です、背は私より高くて、すごい金髪でした。
—染めている、それに違いない。スシは言った。
—ええ、私は知りません。多分それは確かにすごく美人です。
—ええ　君どうやって知ったの？　ペペが質問した。
—それが変で、ホテルのカウンターでジントニックを飲んでいた、彼女は煙草の火を借りるために私に近づいてきました。私を誘惑しようとしているのではない、火を借りたいのだと私は思いました。どうしてその夫人が、私のようなタイプ者に目を付けたのだろう？この出来事は、彼女に火を貸し、私の傍に彼女が座り、そして私達は話し一緒に過ごした・・だけことでです。
—それで彼女の職業は何なの？
—真実、私は彼女尋ねなかった。彼女はここで何日か過ごしていると私に言った、それが全てです。
—君達、何と言うホテルに滞在したの？　スシが尋ねました。
ペペは考えた。実際に調べれば分かることと考え、質問が頭に浮かばなかった。
—ロス モンテロスに。
—おやおや。とペペは言った。雑誌社の君達への待遇は良いなあ...